

Real Facts and Stratagems about the Tiananmen Incident Arised after Lapse of 30 Years

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 青延 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1183

天安門事件

— 30年後に浮かび上がる真相と謀略 —

加藤青延

1. はじめに

30年前の1989年6月4日、北京で民主化運動を人民解放軍が武力制圧した天安門事件は、中国共産党の統治体制の正統性を揺るがすと同時に、国際社会の中国に対する見方を大きく変える衝撃的な事件であった。事件直後の現地からの報道や、その後、漏れ伝えられる様々な情報に基づき、これまでも真相を追求する書籍や論文が数多く世に出されてきた。しかし、中国共産党及び中国政府は、この事件についての中国国内での報道や研究を事実上禁止するとともに、事件に関わる情報を非公開にしてきたため、公式な記録も含めて、その時に何が起きたのか、犠牲者の数はどの程度にのぼるのか、事件当時中国共産党の最高指導部でどのような権力闘争があったのかなど、十分に解明されていない点が多い。

これまで世に出された論文や書籍の多くは、その分析の根拠や視点から、大きく分けて以下の3つに分類される。

- (1) 事件前後の中国メディアによる公式報道や当局作成の国内向けの内部書籍、当時民主化運動に関わった学生・知識人側の発表内容を時系列的にまとめることで全体の動きにアプローチしようとするもの。
- (2) 事件後に持ち出された中国共産党内部の記録、あるいは事件後に中国国外に逃れた政府・軍関係者の証言などによる実態の究明。

(3) 当時現場で取材したジャーナリストが、自らの体験に基づき追跡取材をおこない事件の動きや背景を再現しようという試み。

これらはいずれも天安門事件を理解する上で、貴重な先行研究となり、大きな役割をはたしてきたといえる。

それにもかかわらず、犠牲者や負傷者の数がいまだにはっきりしないこと、当時、権力を掌握していた党中央軍事委員会主席の鄧小平や、中国共産党総書記の趙紫陽、それに戒厳令布告で重要な役割を演じた国務院総理の李鵬が、具体的にどのような力関係の中で、柔軟な対話路線から軍による強制的な武力排除という強硬手段に転じたのかについて、当事者の内心まで踏み込んで真相を突き止めるにはまだ情報の信ぴょう性も含め不明確な面が多かったということも事実であろう。

香港では天安門事件のあと、年月を経るにつれて、中国最高指導部の議事録や軍の出動状況を克明に記す書籍も出版されたが、「秘密文書」に依拠しているだけにそこに書かれている内容がどこまで真実であるのか、出所や具体的な根拠が記されていない部分が多く、また詳細な部分のくい違いも検証しづらいため、なかなか定説として定着するまでには至っていないものも少なくない。

こうした中で本研究は、主として当時、中国共産党の最高指導部に身を置き学生運動に理解を示した総書記の趙紫陽と、学生運動に批判的だった国務院総理の李鵬が、それぞれ生前に残した当時の記録を比較分析することで、当時最高指導部内で実際に起きた意見対立や権力闘争、権謀術数の思惑を特に当事者の内心面からも浮き彫りにしようという新たなアプローチを試みることにしたものである。

趙紫陽は、学生運動に理解を示し、部下を通じて支援していたと見られる進歩的な指導者として位置づけられ、一方、李鵬はそうした趙紫陽の政治手法に批判的で、学生運動に強い危機感を抱き、最終的に趙紫陽を失脚させ、戒厳令を敷くことで天安門事件を引き起こすことになった保守派の指導者の代表格ともいえる。

興味深いことに、趙紫陽は生前、軟禁生活の中で自ら克明なメモに基づき録音した『回想録（『改革歷程』）』と、軟禁された趙のもとに足しげく通った知人が聞きとった談話をまとめた『軟禁中の談話（『趙紫陽 軟禁中の談話』）』を残していた。また李鵬は自身の日記をまとめていた。それらは、中国国内では「禁書」として公表されていないが、近年、香港の出版社が出版した書籍やその翻訳などを通じてわれわれも知ることができるようになった。これらの記録は、それぞれ別々に出版されている。当然のことながら、趙紫陽も李鵬も、自らの正当性を主張する立場から書き記しているため、どちらか一方を読んでも、片寄った視点に基づく歴史観が形成されることになる。だが、双方の異なる見方をすり合わせながら、これまでに発表されてきた関連文献をベースに組み立てなおすと、壮絶な権力闘争を行う指導者の内心面のかっとうが浮き彫りになり、また民主化を求める学生運動そのものも、そうした最高指導部における権力闘争によって翻弄され、武力鎮圧という最悪の手段をとらなければ収拾できないところまで暴走したということまで見えてくる。

何よりも、趙紫陽の『回想録』・『談話』と李鵬の『日記』は、他の出所不明の「秘密文献」や内部文献の情報と異なり、政治に関わった最高指導者が自ら残した記録であることから出所がはっきりしており、信ぴょう性も高く、実際、彼らが心の内で、当時それぞれの事象にどう向き合っていたのかを突き止める一級の史料であることは間違いない。

本研究では、まずこれまでに収集できた情報資料から、天安門事件の犠牲者数を考察した後で、悲劇をもたらした中国共産党最高指導部における、改革派と保守派の権力闘争の実態を、趙紫陽及び李鵬の残した記録を突き合わせることで解明することにした。

趙紫陽の記録については、『改革歷程』（香港新世紀出版社）とその邦訳の『趙紫陽極秘回想録』（光文社）、『趙紫陽 軟禁中談話』（香港開放出版社）とその邦訳の『趙紫陽 中国共産党への遺言と「軟禁」15年余』（ビジネス社）を原著とした。また李鵬の記録については、『李鵬六四日記真

相 付録原文』(澳亜出版有限公司版)を原著としたことをあらかじめ明らかにするとともに、本論文中では、前者を趙紫陽の『回想録』及び『談話』、後者を李鵬の『日記』と略して記すことにする。

2. 天安門事件の死者数に関する考察

天安門事件における死者の数は、中国政府の公式見解が319人(軍人も含む)。また近年機密指定が解け公開された英国の「機密文書」には約1万人と記されており、大きな開きがある。横浜市立大学名誉教授の矢吹晋氏編訳の『チャイナ・クライシス重要文献 第3巻』(蒼蒼社)には、1989年当時に中国の党・政府側が発表した数字が以下のようにまとめている。

発言者・出所	死者	負傷者
米NBC記者による袁木國務院報道官へのインタビュー(6月11日)	大体300人(軍・暴徒・少数の見物人含む)	見物人・群衆と暴徒 2千人 軍は5千人
北京市党委弁公庁編『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀実』(大学は6月14日までに判明分 工業系統は6月21日まで判明分)	北京市の大学の死者42人(学生36人教職員6人) 北京の工業系統の職員・労働者43人	北京の工業系統の職員・労働者 負傷者数154人 行方不明者12人
陳希同北京市長「動乱制止反革命暴乱平定情況報告」	群衆は200余人 軍人、警官は数十人	群衆は3千余人 警官は6千余人
当局作製のビデオ「北京風波を記述する」(北京週報9月12日)	群衆300人近く うち大学生36人含む	軍将兵6千人 民間人3千人
李鵬総理(9月17日、伊東正義訪中団に対する談話)	死者319人 (軍人も含む)	

これらの数字は、いずれも事件がおきた1989年に公表された数字であり、その後は非公表となったためか、中国政府の公式見解は現在もこの319人のままとされている。

だが中国政府内部ではその後も確認作業が進み、実際にはそれ以上の死傷者が出ていたはずだということが、様々な研究で指摘されてきたが、中

国政府は公開することなく確認が困難な状況が続いてきた。

筆者が把握できた情報のうち、これまでのところ一番実態に近い数字ではないかと見ているのが、天安門事件の翌年、1990年7月15日、中国の公安省が国務院に対して行った「各地の動乱と暴乱に関する死傷者状況の統計資料総括」に示された数字である⁽¹⁾。

それによると1989年4月から6月初めにかけて起きた中国の民主化運動を制圧する過程で、全国各地で合わせて931人が死亡し、2万2000人余りが負傷したという。

北京では523人が死亡。そのうち北京の学生は57人。北京市民が45人。

北京以外（外地）からきた学生が171人。外地からきた労働者らが229人。また身元不明の人が21人いた。また制圧に関わった軍や警察側も45人が死亡した。

また負傷者の数については学生・市民側が重傷者を含めて1万1570人あまり。また軍・警察側が6240人あまりとなっている。

ただ、犠牲者の数は北京だけにとどまらなかった。北京の民主化運動と呼応するように、中国21都市で5000人以上の規模のデモや抗議活動が起こり、軍や警察と衝突していた。抗議運動に参加した人の数は合わせて約372万人にのぼる。

図1 「中国公安省が国務院に報告した死傷者数」(負傷者は概数)

都市名	学生市民死者数	学生市民負傷数	軍警察死者数	軍警察負傷数
北京	523	11,570	45	6,240
成都	277	2,100	9	550
武漢	12	170	0	125
貴陽	29	290	0	150
ハルビン	7	90	0	190
鄭州	6	130	0	150
蘭州	21	200	2	120
その他	56	7,450	NA	NA
全国	931	22,000	NA	NA

出所：雑誌『争鳴』1996年6月号

図1の表を見ても分かるように、1989年4月から6月上旬までに、大規模な抗議デモが発生している。治安部隊と挙げしう衝突した主な都市としては、上海、成都、武漢、広州、貴陽、鄭州、瀋陽、ハルビン、西安、蘭州などが挙げられる。また、大規模な衝突には至らなかったものの、5000人以上の抗議デモが行われたのが、天津、重慶、太原、長沙、ウルムチ、南京、南寧、南昌、杭州、石家荘などとされる。(図2参照)

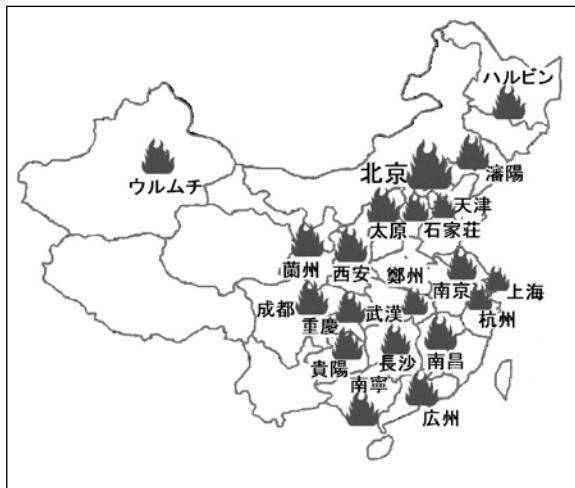


図2 規模5000人以上のデモが起きた主要都市

3. 胡耀邦の追悼式をめぐる指導部内の対立

中国の学生運動が始まったきっかけは、1989年4月15日、元総書記で一般の政治局員に降格されていた胡耀邦が死去したことであった。

胡耀邦は、天安門事件の3年前、1986年12月に北京や上海で起きた民主化運動に柔軟な対応をしたことを、最高実力者の鄧小平や党内保守派から厳しく批判された。

胡耀邦は自らの過ちを受け入れ、翌年1月16日、中国共産党の政治局

員以上の幹部や長老で構成する政治局拡大会議で、総書記から政治局員に降格になった。そして当時國務院総理だった趙紫陽が代理総書記を務めることになった。

当時、民主化運動に立ち上がった各地の学生たちは、自分たちの軽はずみな行動が、民主化運動に理解を示した胡耀邦を降格に追い込んだことを深く反省し、胡耀邦の立場をこれ以上おとしめてはならないと、それ以降、過激なデモや座り込みなどの抗議活動を自粛するかたちになっていた。

このため1989年4月の胡耀邦の突然の死は、大規模な抗議活動を控えてきた学生たちの心を、それまでの忍耐の呪縛から一気に解放つことになった。

学生たちの怒りをさらに炎上させたもう一つの要因として胡耀邦の死が壮絶なものだったと誇張されて伝えられたこともあったと考えられる。

李鵬の『日記』には、胡耀邦が心臓発作を起こしたのは、4月8日午前9時から中南海の懷仁堂で開かれた政治局会議で、国家教育委員会の主任だった李鉄映が教育問題に関する共産党の決定案を説明している最中だったと記されている。たまたま当時上海の党委員会書記だった江沢民が携えていた硝酸薬を胡耀邦に飲ませ、なんとか命を取り留めたが、一週間後の15日早朝、担ぎ込まれた北京病院で二度目の発作に襲われそのまま帰らぬ人となった。ところが当時、学生たちにはそのような詳細な事実関係までは伝わらなかった。筆者が15日当日、北京大学で学生たちの取材中に耳にした話しは、だいぶ誇張された情報だった。胡耀邦は保守派長老と激しく口論している最中に心臓発作をおこした。つまり、保守派長老にいびり殺されたという噂が、学生たちの怒りの感情に拍車をかけた形だった。胡耀邦と保守派長老は、それ以前からしばしば衝突し、激しく口論する場もあったことから、胡耀邦に相当なストレスが蓄積していたことは間違いない。そこで誇張された情報を疑う学生はあまりいなかったと筆者は当時の情勢を取材メモから判断する。

翌16日には北京の17大学に加え、天津の南開大学、天津大学、上海の

復旦大学、同済大学などをはじめ、西安、湖南省、南京、合肥などの大学でも追悼の垂れ幕や壁新聞が貼られた。学生たちがデモを行った都市の数は、北京、上海、天津の3大直轄市に加え、南京、長沙、ハルビン、大連、合肥、成都など内陸部の地方都市にも急速に拡大した。

17日、天安門広場の中心にある人民英雄記念碑の周りに座り込んだ学生たち約200人は、政治の民主化や報道の自由などを求める要求をまとめた。20日に公表された内容によると、当時、学生たちは、政府に対して以下の7項目を要求することを決めた⁽²⁾。

- (1) 胡耀邦の政治的業績の公正な再評価。民主化に寛大な姿勢を肯定すること。
- (2) 反精神汚染と反ブルジョア自由化運動を徹底的に否定すること。
- (3) 民間のニュース発信と言論の自由を許すこと。
- (4) 党、国家の指導者とその家族の収入や財産を公表すること。
- (5) 北京市のデモを規制した条例の条項を取り消すこと。
- (6) 教育経費を増やし、知識人の待遇を向上させること。
- (7) 追悼活動をありのまま報道すること。

興味深いことに、当時中国当局の姿勢はまだ柔軟だった。広場に座り込んでいた学生運動のリーダーで、当時北京大学生だった王丹らを18日朝広場に隣接する人民大会堂に招き入れた。そして、学生側の7カ条の要求を書き込んだ請願書を取りあえず受け取ったのだ。

当時、中国共産党の中枢部で何が起きていたのか、その様子が、趙紫陽の『回想録』・『談話』と李鵬の『日記』から浮かび上がってくる。

18日午前9時には、中国共産党の最高指導部である政治局常務委員が趙紫陽の事務所に集まり、学生運動への対処と追悼大会の段取りについて話し合った。

李鵬の『日記』によると、この席で李鵬は「学生たちに対して明確な態度を示すべきだ。学生たちに自発的な追悼活動をやめるよう説得すべき

だ」と主張したという。

しかし趙紫陽はそれを聞き入れず、「矛盾を激化させないためには、学生たちを力で押さえたりせず、関わらない方がよい。目下のところは彼らを説得して前向きに導くしかない。力で押しつぶさない限り、矛盾が激化することはない」と答えたという。

一方、趙紫陽の『回想録』と『談話』には、この時に趙紫陽は「党の追悼大会が行われるときに、学生たちが独自に追悼集会を開いたからと言って、それを認めないわけにはいかない」として胡耀邦を追悼する権利を学生には認めず、党や政府が独占するというのは筋が通らないと李鵬に反論したと記されている。つまり大勢の学生を広場に集結させたまま、彼らも追悼大会の「一員」として、人民大会堂の外から追悼大会に事実上「同席」させようという考えを示したのである。

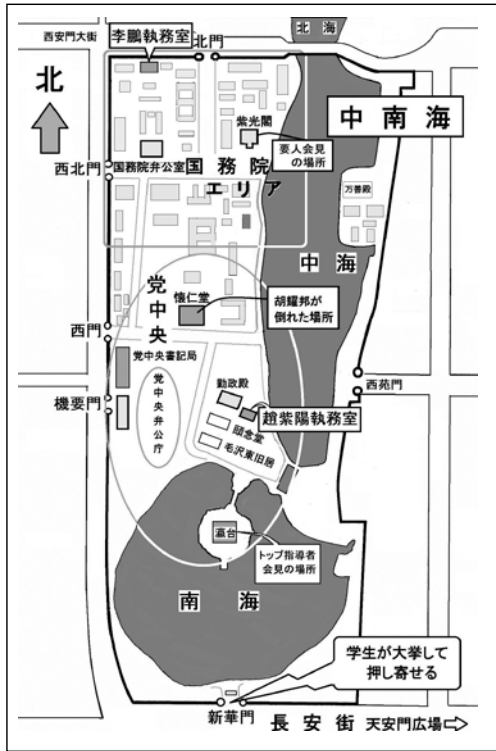
18日の会議で、趙紫陽は「学生運動に対する3項目の対処」を提案した。それは

- (1) 追悼大会が終わった後は、学生たちが広場から大学に戻るよう説得すること。
- (2) 緊張を緩和するために様々なレベルで学生たちと対話を行い、平和的に問題を解決してゆくこと。
- (3) 何が起ころうとも流血の事態を避けなくてはならず、武力による鎮圧はしないこと。

この3項目は、会議に出席した政治局常務委員によって承認されたと趙紫陽は考えていた。

ところがその18日の深夜と19日の深夜の2度にわたって、勢いあまった学生たちが、首相の李鵬に直談判しようと、最高指導者らの執務室がある中南海に大挙して押しかけ、長安街に面した中南海の南側の門、新華門の前で、警備の警察官らと衝突になった⁽³⁾。

このうち18日夜はウアルカイシなど学生リーダーたちは中南海の中に入るのではなく、門の前で座り込みをするなど比較的穏便なものだった



が、19日の夜から20日未明にかけては学生の集団が中南海の中に入ろうと押し寄せ、「李鵬出てこい！」などと叫びながら警備の警察隊と激しく衝突した。

趙紫陽の『回想録』には、その時李鵬が趙紫陽に対して「学生たちが新華門を突破しようとしているぞ！どうして何も対策がとられていないのだ」と詰問口調で電話をかけてきたと記されている。これに対して趙紫陽は、新華門の警備は喬石の担当だと受け流したという。

一方、李鵬は『日記』の中で、19日の夜11時に趙紫陽と電話をしたことに触れ、「私は情勢に変化が起きているのですぐに検討すべきだと言ったが、彼は明日検討すると言った。新華門の前の状況について、彼は良くわからないと言い、『打ちこわしのような過激な行動でなければ、こちらは何も行動をとらない』と言った」と記している。実は学生達は、中国共産党のトップである趙紫陽ではなく李鵬との直談判を強く求めていた。学生たちがこの時点ですでに李鵬ばかりを「敵視」する傾向が強かったことから、李鵬側は、18日の政治局常務委員の会議の議論の中身が趙紫陽側から学生たちに漏えいしたとの疑いを抱くようになったと考えられる。

趙紫陽与李鵬の間には、この時点で学生たちの動きに対する見方に、す



でかなりの温度差があったことがうかがえる。

胡耀邦の追悼大会は、4月22日に行われた。北京の学生らは、前夜遅くに隊列を組んでそれぞれの大学を出発し、22日午前2時には既に20大学の3万人あまりが広場に到着した。学生たちは、大学ごとに旗を掲げ、列を作り所定の場所に陣取った。しかし当局は広場の学生を排除しなかった。

これは18日の政治局常務委員の会議で、趙紫陽が、大勢の学生を広場に集

結させたまま、彼らも追悼大会の「一員」として、人民大会堂の外から追悼大会に事実上「同席」させようという考えを示したことを受けての当局の対応だったと考えられる。趙紫陽の意向があったからこそ、追悼大会では、学生を排除せず、天安門広場のスピーカーに、人民大会堂の追悼式の音声を同時中継の形で流すという、学生たちへの異例の配慮がなされたのであった。

4. 保守派の決起となった「動乱社説」

4月26日、中国共産党の機関紙「人民日報」の一面トップに、民主化を求める運動を続けていた学生たちを強く非難する社説が掲載された⁽⁴⁾。

「旗幟を鮮明にして動乱に反対せよ」というタイトルで始まるその社説

(以下「動乱社説」とする)では、胡耀邦の死をきっかけに全国規模で始まった学生たちの民主化運動を「動乱」と決めつけ非難した。そしてそのような動乱を、断固として阻止しなければならないと呼びかけたのだ。

その概略を示すと以下の通りになる。

「胡耀邦の死去に対する多くの大衆の悲痛な気持ちを考慮し、党や政府はこれまで忍耐と自制の態度をとってきた。追悼大会の時には、本来、天安門広場も立ち入り禁止にするのが慣例だが、それをせず、共に胡耀邦同志を追悼することを許した。

だが、追悼大会の後、ごく少数の人は、意図的に学生の哀悼の心を利用し、様々なデマを作り上げ、人心を惑わし、壁新聞などを利用して党や国家の指導者を攻撃した。

彼らは民主を旗印に掲げて民主法制を破壊し、全国を混乱させた。これは計画的な陰謀であり、動乱だ。これは中国共産党と全国人民に対する深刻な政治闘争だ。

もしこの動乱に対して、寛容さを見せたり、放任したりすれば、さらに深刻な混乱の局面を招くことになるだろう。

全ての中国共産党員と全国人民は、この闘争の重要性をはっきりと認識して団結し、旗幟を鮮明にして動乱に反対すべきだ」

26日の社説は、学生運動に対する中国共産党の立場が、それまでとは



(人民日報 1989年4月26日付紙面より)

一変したことを物語っていた。党の方針が大きく変わる時には、その裏に必ず党内の権力闘争があることを暗示していることが少なくない。この時には、どのような権力闘争があったのだろうか。

実は、この学生運動を非難する「動乱社説」が掲載された時に、学生運動に寛容な姿勢を示していた趙紫陽は、中国ではなく北朝鮮にいた。趙紫陽の不在の間に、保守派が形勢を逆転したのである。

趙紫陽は胡耀邦の追悼大会の翌23日から北京をはなれ専用列車で北朝鮮を訪問していた。

24日夜、趙紫陽ぬきでの政治局常務委員会議が開かれた。趙紫陽は北京を離れるにあたって、何かあれば李鵬が代わりに政治局常務委員を招集し、政治の指揮をとるよう任せていたことが裏目に出た形だった。会議には、政治局常務委員の喬石、胡啓立、姚依林をはじめ、楊尚昆、万里、田紀雲、李錫銘、宋平、丁閔根らが出席した。この会議で、学生デモに対する対処が話し合われ、「デモは組織的かつ入念に計画された政治闘争だ。我々は旗幟を鮮明にして有効な措置をとりこれを制止しなくてはならない」との意見で全員が一致した。

李鵬の『日記』によるとこの会議で、李鵬が三つの選択肢を提案したという。第一の選択肢は、今日の常務委員会議の精神を人民日報に社説として掲載すること。第二の選択肢は、党中央と国務院が共同で全国各省市に通達を出すこと。第三の選択肢は北京で党・政府・軍の幹部大会を開き今日の会議の精神を伝えること。会議では、李鵬の示したこの選択肢のうち、どれを実行すべきかが話し合われた。そして、社説を掲載するという第一の選択肢がよいだろうということになり、一気に政治の流れが変わった。

翌25日午前10時に李鵬と楊尚昆が鄧小平の自宅を訪ね、前日夜の政治局常務委員会議の内容を伝えた。これに対して鄧小平はこれに同意し、「これはもはや普通の学生運動ではなく、共産党の指導と社会主義を否定する動乱だ」とする非公開の演説をひとしきりぶった。

26日に人民日報に掲載された「動乱社説」は、その時の鄧小平の演説

に基づくものだった。

趙紫陽の留守中に開かれた政治局常務委員会議の議事内容や鄧小平の演説は、北朝鮮を訪問中の趙紫陽にも伝えられた。これに対して趙紫陽は「鄧小平同志の動乱問題への対処の方針に完全に同意する」とする電報を打ち返したが、本意ではなかったようだ。

趙紫陽は『回想録』の中で、「大規模なデモに参加した大勢の学生の訴えの中で、もし共産党や鄧小平ら幹部を名指し攻撃したスローガンばかりを集めてつなぎ合わせれば、デモが過激化したように見せかけることができる。だがそれは全体の声ではない」と記している。つまり、くだんの「動乱社説」は、学生運動が凶悪化したように見せかけようとした保守派の陰謀だと趙紫陽は感じていたことが読み取れる。

一方、「動乱社説」の掲載に反発した学生たちは、掲載翌日 27 日に北京市内で大規模なデモを実施した。「動乱」だと決めつけられないよう、デモの時に掲げるスローガンも、「共産党と社会主義を擁護する」「民主万歳！」「反官僚、反腐败、反特権」「憲法擁護」「愛国無罪」「真相報道」などに統一するよう学生の自治組織から呼びかけが行われた⁽⁵⁾。

デモには北京 38 の大学の 3 万人あまりが一斉に繰り出し、「動乱社説」がさらに学生運動の火に油を注ぐという逆効果になった。

4 月 30 日北朝鮮からもどった趙紫陽のところに李鵬がとんできた。趙紫陽の『回想録』はその時のことをこう述べている。

「北朝鮮から帰国すると、李鵬が待ちかねたように私のもとにやってきた。そして私に早く会合を開き北京市党委員会の報告を聞くように求めた。みんなで圧力をかけて、私の留守中に自分らがとった行動に支持を表明させようとしたのだ。」

「李鵬らは『動乱社説』が撤回されることをひどく恐れていた。特に、帰国した私が彼らの行動を支持しないのではないかと心配していた。党書記局書記の閻明復からの報告では、李鵬は彼に、もし私が『動乱社説』を支持しなければ、自分は辞任するしかないと言ったそうだ。李鵬と政治局

常務委員の姚依林は結託し、5・4運動記念日に私が行う演説の中に『動乱に反対する』とか『ブルジョア自由化に反対する』といった文言を入れるように求めてきた。」

その一方で、「動乱社説」の基礎となる発言をした鄧小平は、自分の発言が、若者たちの自分に対するイメージが傷つけたと考え、娘が趙の秘書に、「鄧は若者を愛しく思う庇護者である」という言葉を趙紫陽の演説の中に入れるよう電話で求めてきた。

鄧小平には、こうしてみると開明的な側面と保守的な側面の両方があったことがわかる。趙紫陽はその開明的な側面にすがろうとし、李鵬は逆に鄧の保守的な側面を利用しようとしたのである。

中国共産党の最高指導部は、5月1日政治局拡大会議を開いた。この会議では、学生デモに寛容な姿勢をしめすか、断固とした措置をとるかで、趙紫陽をはじめとする改革派と李鵬や長老ら保守派の意見が激突した。

趙紫陽は『回想録』の中でこう述べている。

「私の耳には『動乱社説』が強い反発を引き起こしていることが聞こえてきた。だが党の方針をいきなりひっくり返すわけにもいかなかったので、李鵬がしたこと、ある程度の賛意を表明するしかなかった。同時に、『民衆の大多数が政府は自分たちを抑圧しようとしていると感じるような状況を作ってはならない』と強調した。理由はともあれ、4月26日の社説で表明された意見は、民衆の大多数、特に学生、知識人、民主党派の考え方から著しくかけ離れたものであるという事実を、我々は冷静に受け止めなくてはならない。さらに学生らに授業に復帰するよう勧めるべきだとも述べた。授業が再開されれば、状況が安定して学生たちの興奮も収束するだろう。そうすれば他の様々な問題もやがて解決するかもしれない」

一方、李鵬は『日記』の中でこの政治局拡大会議についてこう書いている。

「4月26日の『動乱社説』の問題について、会議で激しい論争が行われた。大多数の同志たちは、社説が全国の情勢を安定させる上で積極的な役割を果たしたと考えていた。北京市の同志は、社説を断固として擁護する

と表明した。楊尚昆同志は、『鄧小平が熟考に熟考を重ねた末、動乱だと判断した。これは中央が長年にわたり政治思想工作を十分にこななかった結果なのだ』と語った。」

こうしてみると、「動乱社説」をめぐる趙紫陽と、李鵬ら保守派の指導者との見解はまったく食い違い、趙紫陽が最高指導部の中でかなり浮いてしまったとの印象を受ける。趙紫陽は、もはや最後に頼れるのは、自分を総書記に抜てきしてくれた鄧小平しかいないとの考えに至ったようだ。

中国共産党の指導部が学生デモへの対処をめぐる意見がまっ二つに割れる中で、趙紫陽は救いの手を、最高実力者の鄧小平に求めようとした。

趙紫陽は『回想録』の中でこう述べている。

「問題は鄧小平だった。私は鄧が少しでも緊張を緩和するように動いてくれることを望んだ。例えば『4月25日に李鵬から報告を受けた時に、状況をいくらか深刻にとらえすぎた。デモをしてもたいしたことは起こらない』というような談話を発表してくれれば鄧に何の責任も負わせることはなく、事態を好転させることは可能だった。私はなんとしても鄧と会って支持を得ようと思った。そこで鄧の秘書の王瑞林に電話をかけて、鄧との面会を求めたが、鄧は最近体調が悪いということだった」

「動乱社説」が掲載された直後、鄧小平は静養を理由に、渤海湾に面した避暑地北戴河に「緊急避難」していた。結局趙紫陽は、鄧小平に会うことすらかなわなかったのである。

5. 趙紫陽の巻き返し

趙紫陽は5月4日、北京で開かれていたアジア開発銀行の総会が閉幕したことを受けて、アジア開発銀行の一行と会見した。鄧小平の支援を受けられなかった趙紫陽は、この場で、「動乱社説」の否定ともとれる演説を行った⁽⁶⁾。その主な部分を要約するとこうなる。

「私は学生たちのデモの基本的なスローガンが『共産党を擁護する』、

『社会主義を擁護する』、『憲法を擁護する』、『改革を擁護する』、『民主を推進する』、『腐敗に反対する』であることを強調して指摘したい。彼らはいずれの根本的な制度に反対しているわけではなく、われわれの仕事上の欠点を改めることを要求しているのだ。現在、北京やほかの都市でもデモが依然として続いている。しかし私は事態が次第に収まってゆき、中国に大きな動乱が起きることはあり得ないと深く信じている。そのことには十分自信がある。民主や法制のルールの上で学生たちの合理的な要求は解決すべきだ。

「今最も必要なことは、冷静で、理性的で、感情を抑え、秩序を守りながら民主と法制のルールの上で問題を解決することだ。党と政府は今そのようにするための準備している。私は、学生や各界の人たちがそのようにすることに賛成してくれると信じている」

この演説について李鵬は『日記』の中でこう記している。

「趙紫陽はアジア開発銀行一行との会見の後、その場でポケットから演説の原稿を取り出し、取材していた新華社の記者にそのまま渡した。そして、この原稿に基づいて記事を配信するよう指示し、一字一句改めてはいけないと釘を刺した。趙紫陽の秘書鮑彤（ほう・とう）は会見の後、新華社と人民日報、それにラジオテレビ省の責任者に電話をかけ、新華社は演説の全文をそのまま報じること。人民日報は最も目立つところに記事を掲載し、これを支持する報道を大量につけくわえること。テレビやラジオも3日間繰り返し全文を放送するよう求めた。これは、趙紫陽が、党中央と鄧小平の路線に対立する立場に立つことをはっきり示したものだ」

保守派は重要な演説の内容を事前に政治局常務委員や鄧小平に根回ししていなかったことを趙紫陽の暴走ととらえ批判を強めた。

一方、趙紫陽は、李鵬ら保守派の反発に対して『回想録』の中でこう記している。

「私の5月4日の演説によって、党中央内部の亀裂が表面化し、意見が真っ二つに分かれたことが学生運動を長引かせたと言われるが、それは誤

りだ。本当の理由は、私が北朝鮮から帰国した後に提示した指針、つまり『緊張を緩和し、対話の道を開き、民主と法治という手段で問題を解決し、政治改革を推進することによって緊急の問題に取り組むための指針』が李鵬一派の抵抗と妨害でつぶされたからだ」

趙紫陽は自分が留守中に、保守派が動乱社説を掲載したことに恨みを抱き、アジア開発銀行一行との会見の場を利用して意趣返しをしたのである。

6. ソ連・書記長訪中で対立は修復不能に

ソ連のゴルバチョフ書記長が5月15日から中国を訪問した。それは1950年代後半から悪化した中ソ両国関係を正常化する歴史的な訪問であった。中国で民主化運動を進めていた学生たちにとって、新思考としてペレストロイカ（政治体制改革）やグラスノチ（情報公開）をとるゴルバチョフは、理想的な指導者と見られていた。

学生たちはゴルバチョフの訪中を前に、13日から天安門広場でのハンガーストライキを決行した。学生たちの「ハンガーストライキ宣言」では、次のような要求を掲げた⁽⁷⁾。

- (1) 北京の大学の対話代表団と中身のある具体的で誠意のある平等な対話を速やかに実施することを求める。
- (2) 今回の学生運動の名分をただし、公正に評価し、愛国民主の学生運動であることを肯定するよう求める。

宣言は次のような言葉で締めくくられた。

「動乱ではない！ただちに名誉回復をせよ！ただちに対話せよ！引き延ばすな！

世界の世論よ、どうかわれわれを応援してほしい！各界の民主勢力よ、どうかわれわれを支持してほしい！」

おなじ5月13日、趙紫陽と楊尚昆が鄧小平の家を訪れ、話し合いの場が持たれた。

趙紫陽と鄧小平が顔を合わせるの、胡耀邦の追悼大会以来のことだった。追悼大会以降鄧小平は、体調が思わしくないことを理由に、趙紫陽の面会要請を断り続けてきた。ゴルバチョフの訪中がせまり、鄧小平は、その前に、趙紫陽と口裏を合わせておく必要があると考えて面会に応じたのであろう。

趙紫陽の『回想録』によると、この面会について趙は、目前にせまったゴルバチョフ訪中に備えて、打ち合わせをするためだったとしつつ、この機会をとらえて学生デモの最近の状況について鄧に伝えた。そして、率直な対話、腐敗の一掃、透明性の実現などについて自分の意見を述べたと述べている。これに対して鄧小平は大筋で同意し、「この機会をうまくとらえて腐敗をしっかりと一掃すべきだ」、「透明性の向上も大切だ」と語ったという。

もしこれをもって趙紫陽が鄧小平は自分の考えに「大筋同意した」と考えていたのだとすれば、その後の失脚につながる大いなる誤解だったと言えるだろう。

李鵬の『日記』ではこの会談で鄧小平はこう述べたと記されている。

「鄧小平同志はこう言った。『非合法の学生組織は承認できない。私は今とても疲れている。頭も働かない。耳鳴りがするので、趙紫陽の話していることが聞き取れない。』実際には、鄧小平同志は趙紫陽が求めた透明性のことをはっきり否定していたのだ。」

つまり李鵬は、鄧小平と趙紫陽の久々の会談はすれ違いに終わったとの見解だ。

趙紫陽は『回想録』の中で、ゴルバチョフの訪中をめぐり盛り上がりを見せた学生たちの行動をこう書いている。

「学生たちは政府に圧力をかける絶好の機会であり、政府としてはゴルバチョフの訪問期間中に寛容な態度を示さざるを得ないだろうと考えていた。だがそれは思い違いだった。学生側が運動を激化させればさせるほど、李鵬一派にとっては武力鎮圧の口実が増えることになる」

実際にその通りになった。

中国共産党当局も、確かに、民主化に理解を示すゴルバチョフが訪中している間は、学生たちに強硬な姿勢をとることは、外交上好ましくないと判断した。30万人にもものぼる学生たちが天安門広場を占拠していたため、本来は広場に面した人民大会堂前で行われる予定だった歓迎閲兵式は、急遽、空港に場所が変更された。また16日に予定されていた広場中心にある人民英雄記念碑へのゴルバチョフの献花は中止された。

ゴルバチョフと中国要人との会談は、16日の午前中に鄧小平、午後には李鵬、趙紫陽の順番で行われた。鄧小平との会談では、中国とソ連が正式に関係を正常化したことを宣言した。

問題になったのは、最後に行われた趙紫陽との会談だった。この席で趙紫陽はこう述べた。

「鄧小平同志は、1978年第11期中央委員会第3回総会（三中全会）以来、国の内外から公認されたわれわれの党のトップリーダーだ。第13回党大会の時に、彼の求めに基づき、彼は中央委員と政治局常務委員から引退した。しかしわれわれが彼から離れられず、彼の知識や経験から離れられないことをわれわれの党全体がみな知っている。このため、第13期中央委員会第1回総会（一中全会）で、最も重要な問題については、依然として鄧小平同志のかじ取りが必要であることを厳かに決定したのだ」⁽⁸⁾

中央委員会総会の秘密決定の内容を外国人に漏らすことは明らかに党規約に違反していた。それが趙紫陽失脚の決定打になったと当時は考えられた。だが、実際には、鄧小平をおとしめる政治的な意図があったと鄧小平にうけとめられたことが一番の打撃だったようだ。

なぜこのような発言をしたのか、趙紫陽の『回想録』ではこう述べている。

「私の発言は、二つの問題を同時に説明しようとしたものだった。鄧・ゴルバチョフ会談が最高首脳会談である理由と、鄧が引き続き中国共産党の最高指導者の地位にあるのは党中央委員会の決定によるもので、したがって合法であるという事実、この二つである。

会談後、最初のうちは肯定的な反応が多かった。ところが後になって、鄧小平と家族が私に対して不快感を示しているどころか、激怒していることがわかった。これは予想外のことであった。一体、なぜ鄧小平は私とわざと彼を前面に立たせて民衆と対決させ、私が自分の責任逃れをしようとしていると考えたのであろうか。だれがどんなふうにして鄧を怒らせたのかは、いまだにわからないままで」

一方、李鵬の『日記』にはこう書かれている。

「趙紫陽の言葉自体は実情に符合するが、国家が動乱の危機に面しているこのようなタイミングを選んでこのことを話すことには、意味深長だ。つまり 1988 年の経済混乱や現在の政治動乱も鄧小平に責任があることを世に知らしめるものだ。趙紫陽は、名義上の総書記であり、鄧小平の指示に従って仕事をしているに過ぎないということ」

李鵬が懸念したように、翌 17 日には、鄧小平を驚がくさせることが起きた。趙紫陽のブレーンとして知られ、中国社会科学院政治学研究所の所長も務めたことがある嚴家其ら、著名知識人が、学生運動を支援すると同時に、鄧小平の完全引退を求める「5・17 宣言」を発表したのである⁽⁹⁾。

宣言の要約は以下になる。

「清朝が減びてから既に 76 年になるが、中国にはまだ一人の肩書きのない皇帝がいる。一人の高齢で愚昧な独裁者がいる。昨日午後、趙紫陽総書記は、中国の一切の重要政策は必ずこの年老いた独裁者を経て決めなくてはならないことを公けに宣言した。動乱社説も独裁者が口にしなければ否定することもできない。学生たちは既に自らの行動をもって、今回の学生運動が動乱ではなく、中国が最後に独裁と帝政を埋葬しようとする偉大な愛国民主運動だと宣言した。大学生万歳！人民万歳！民主万歳！自由万歳！」

李鵬は天安門事件後の 6 月 23 日に開かれた中国共産党中央委員会でを行った秘密演説の中で、こう述べている。

「趙紫陽同志とゴルバチョフとの会談の内容が発表された翌日、デモの人数と鄧小平同志への攻撃はかつてない水準まで高まった。デモの隊列に

は『鄧小平打倒』『鄧小平は退陣すべし』などの標語、横断幕がいたるところで見られた。これと同時に『趙紫陽を擁護する』『趙紫陽万歳』などの標語スローガンもデモ隊と天安門広場にあふれた」⁽¹⁰⁾

7. 17日に党の強硬方針決定

趙紫陽はゴルバチョフとの会見の翌17日に、鄧小平との会談を求めた。その時のことを『回想録』ではこう述べている。

「17日に電話をかけ、鄧小平との会見を求めた。すると、鄧小平の事務所から、午後に鄧小平の自宅に来るようにと知らせてきた。

政治局常務委員会のメンバー全員と楊尚昆もみな来るといふ。通常ならそこにいるはずの万里は、まだ帰国していなかった。個別の面談を申し入れたはずだったのに、鄧小平は自宅に政治局常務委員会議を招集してしまったわけで、これはよくないことになるだろうと感じた。」

会議は17日の午後4時に始まった。

最初に趙紫陽が学生運動について現状の報告を行った。

鄧小平はそれを聞く間、「とてもいらいだち、納得できないという顔をしていた。話が終わるとすぐに李鵬と姚依林がたちあがり趙紫陽を批判し始めた。」

『回想録』によると鄧小平はこう語った。

「『動乱社説』の判断が正しかったことは、その後の事態の進展から証明される。学生デモがまだ沈静化していない原因は党内にある。すなわち趙紫陽が5月4日にアジア開発銀行の総会で行った演説が原因なのだ。ここでまた彼らに譲歩すれば、事態は収拾できなくなる。よって北京市内に軍を進駐させ、戒厳令を布告することにする」

そして鄧小平は李鵬、楊尚昆、喬石の三名を戒厳令発動の責任者に任命したという。

一方、李鵬の『日記』では、鄧小平のこの日の演説を当時李鵬自身がメモをした記録の内容として次のように克明に記している。その内容は、こ

れまで筆者が知り得た当日の鄧小平の発言の中で最も詳しく詳細な記録と言えるので、ここに少し長めの要約を記す。

鄧小平の演説：

「形勢は大変厳しく、問題は党内から出ている。全国で出現している問題もみな北京の影響を受けている。このため、問題はまず北京の解決から始める。そのまま発展させれば、必ずすぐに全国に広がるだろう。もしわれわれが動乱社説の精神に基づき、仕事を強化し対話を行えば、前向きな者たちが組織され、動乱を行うものを恐れさせ始め、情勢は次第に安定の方向に発展していたはずだ。動乱社説は正しかった。転換点は趙紫陽の5月4日の演説だ。人々に党中央が割れていると見せることになり、学生は更に激しく騒ぎ、多くの人が学生の方に歩み寄った。だから問題は党内から出たものだ。解決の方法は、党内を一致させ、まず党中央を一致させ、もし誤ったらみんなで責任を負うのだ。その精神がなく、論争をしても何になるのか。自ら崩壊を宣言することになる。実際の例はハンガリーだ。騒ぎが起きるとすぐに譲歩した。一步譲歩したら更に騒ぎが起こる。さらに二歩目を譲歩しても満足されず、更に三歩目を譲っても、永遠に満足されず、共産党は崩壊するしかなかった。中国で自由化をしようとする人も同じだ。目的を達成しなければ、手は引かない。もし彼らの目的が達成されるなら、中華人民共和国は必要になるのか、社会主義制度は必要になるのか、共産党は必要になるのか。もし中央が旗幟を鮮明にしていれば、今日のような状況、收拾が難しい状況に発展することはなかった。譲歩すれば譲歩するほど、彼らは騒ぎを大きくし、事態はどんどん発展してゆくのだ。緊急の措置をとらなければ、必ず持ちこたえられなくなる。上海の江沢民同志のところでは、現在まだ持ちこたえられている。さらに事態が発展すれば、彼らも持ちこたえられなくなる。今言い争っている時間はない。誰が誤りを犯し、誰が責任を取るといった問題は、ゆっくり解決することができる。まず何としても動乱の発展を断固として制止し、次に次第に鎮静化させてゆく。もし中央の認識が一致せず、態度がしっかりしなけ

れば、どんな措置をとっても役立つしないのだ。措置は断固として迅速に行わなければならない。私が考える方法は、戒厳令の布告だ。この方法以外に短期間に動乱を平定することはできない。戒厳令の間中は、愚か者をたたかなければならない。動乱を扇動する一部の人をたたかなければならない。しかしたたく人数は多くなくてよい。少数の何人かでよい。戒厳令をしくということは、軍隊を動かすということだ。軍隊もしっかり教育する必要がある。相手が殴りかかってきたときだけ、殴り返せばよい。もし衝突になれば、負傷者が出るのは避けられない。北京は警察力が不足し、戒厳令をしかなければ、正常な仕事の秩序や生活の秩序、学習の秩序を回復させることはできない。素早く動き、準備ができたらずぐに戒厳令を実行する。その目的は、大多数を保護するためであり、さらに多くの人を巻き込み、陥れたりさせないことだ。

戒厳令の実施がもし誤りであったら、私がまず責任を取る。彼らに倒されなくとも、自ら身を引く。いま私はこう認識するに至った。このような時に易々と引っ込んではいられない。文書にして見せなくてもいいが、病気だったからだという理由にしてほしくない。将来歴史を書くときに、誤りは私のせいにしてほしい。すでに他の方法は考えられず、譲歩もできない。さらに譲歩すれば、中国は終わりだ。あつという間に全国規模の動乱になるだろう。

北京の動乱が全国規模のものになれば、文化大革命よりさらにひどくなる。文化大革命は、実際には指導者がいた。毛主席が指導したのだ。いま再び第二の文化大革命が来たように思えるが、しかし共産党は指導を放棄している。動乱の本当のスローガンも出てきた。共産党を捨て、社会主義を捨てようというものだ。われわれの世代は共産党や社会主義のために一生闘ってきた。それを守る責任は、われわれだけでは手に負えない。われわれ二世代でも手におえない。多くの年輩同志は現在の情勢をととも心配しているが、当然のことだ。それはわれわれの事業に対する感情の表れだ」

つまり、鄧小平はこのままでは北京の「動乱」が全国規模の「動乱」に発展し、共産党の支配体制が崩壊するとの危機感を募らせていたことになる。自分が責任を負うから戒厳令を布告せよ。それ以外に道はないと最後の決断をしたのである。

これでその後の全ての方向が決まったと言える。

一方、この会議の席で、李鵬や長老らから次々とするし上げられた趙紫陽は、その時の想いを『回想録』にこう記している。

「そのとき私は、平静を失っており、このまま軍を動員し学生を武力鎮圧する総書記になることなどご免だと考えた。憤まんやる方なく私は帰宅するなり、鮑彤（ほう・とう）に、政治局常務委員会に辞表を送るから文案を考えてくれ、と頼んだ。」

李鵬の『日記』によると、17日に鄧小平の家で行われた政治局常務委員会会議は、午後4時から始まり趙紫陽への批判をした後、午後6時に一旦休憩になった。

そして午後8時に今度は中南海で再開したという。鄧小平は出席しなかった。

その時に趙紫陽はこう語った。

「私が役目を果たす時はもう終わった。既に政治局常務委員会に休暇願の手紙を書いた」

李鵬の『日記』には、趙紫陽が辞表を書いて政治局や鄧小平の下に届けたとして、その内容を記している。

趙紫陽の辞表

「本日午後の政治局常務委員会でなされた決定に、私は従う。しかし私は、事態を平定することは難しく、しかも引き続き拡大し悪化させるかもしれないことを依然として心配している。組織がこの決定の執行をする責任者として私は力不足になるだろう。したがって、私は党の総書記及び軍事委副主席の職を解任するよう求める」

だが趙紫陽の辞表は楊尚昆の説得で取り下げられ、病氣治療のため3日間の休暇願に変えられたというのが真相だ。

8. 権力闘争に敗北した趙紫陽最後の姿

5月19日未明、天安門広場にとめられた二両連結のバスの中でハンガーストライキをしている学生たちのところに、突然、時のトップ指導者、趙紫陽が現れ、広場を離れて大学にもどるよう説得工作を試みた。

その時、現場取材にあっていた筆者は広場の中心部にある人民英雄記念碑の周辺にいた。すると夜明け前の午前4時すぎ、広場の北側、つまり天安門側にとめられていた大量の二両連結バスの1両から明るい光が漏れだすのが見えた。カメラのフラッシュの光も見えた。

「これは何か起きたに違いない」

異変に気づいた私とカメラマンは、すぐさま光が漏れているバスの車両まで駆けつけた。

距離にして二百メートル弱あった。ところが近づくとそのバスの周りは大勢の学生が二重、三重にも取り巻きなかなか近寄れなかった。

そこで筆者は学生たちに向かって「我々は外国のテレビ局だ。取材のため中に入れてほしい」と大声でどなった。すると学生たちは



道を開け、われわれをバスのすぐそばまで通してくれた。見るとバスの中に趙紫陽がいた。さっそくバスに乗り込もうとしたところで、同行していた幹部と見られる中年の男から制止された。

「あなたは外国人記者か。なぜ趙紫陽がここに来ることがわかったのか。これは中国中央テレビなど中国側のメディアしか取材を認めていない」

筆者はすぐに食い下がった。

「趙紫陽が来ることは何も知らなかった。ただわれわれは24時間3交代で広場の取材を続けていたから、たまたま出くわしただけだ。我々が取材している現場に、あなた方のほうがやってきた形なのだ」

しばらくやりあったが、結局バスの中には入れてもらえず、バスの外に脚立をたててその上から窓ごしののぞき込む形で中の様子を取材できることになった。

その時の趙紫陽の姿は、それまでテレビで見かける威風堂々とした指導者の姿とは全く異なるものだった。すっかり肩を落とし、やつれた顔を赤らめこう論していた。

「私が来るのが遅すぎた。君たちはまだ若い。この先、長い人生がある。皆さんが求めている問題はいずれ解決されるだろう。だからひとまずハン



ガーストライキをやめて大学に帰ってほしい。命を粗末にしてほしくない」

趙紫陽の両眼から涙がしたたり落ちているのがはっきりと見えた。

その時、趙紫陽がなぜ泣いたのか筆者は理解できなかった。学生たちが純粋な心から自らの命をかけてハンガーストライキをしていることに同情して泣いたのではないかと考えた。だが、今思えばそれは間違っていた可能性が大きい。趙紫陽は「私が来るのが遅すぎた」と語った言葉にその意味が込められていたのだ。

つまり自分が最高指導者として力を発揮できているうちに、直接、学生たちと会いハンガーストライキをやめさせておきたかった。だが、戒厳令の布告が内定した今となっては、手遅れになってしまった。せめて戒厳令が布告される前に、命を粗末にしないよう学生たちに嘆願する以外に、趙紫陽の役割は何一つ残されていなかったのだ。その切なさ、このまま広場にとどまれば、戒厳軍部隊によって命を落とすかもしれない学生たちに、戒厳令のことを打ち明けることもままならず、ひたすら涙をながして説得する以外に、自分の気持ちを伝える手段がないことへの無念さが、あの趙紫陽の涙となったのだろう。

趙紫陽はバスから降りると、大勢の私服警察官に囲まれる形で広場の東側に移動した。私服警官のまわりを更に大勢の学生が取り巻き、大きな神輿を担ぐ集団のように、人のかたまりが団子のようになりながらゆっくりと進んだ。広場の東側には大型の救急車が後部の扉を開けて待機していた。趙紫陽は最後に学生の方を名残惜しそうに振り返り、最後部の扉から救急車に乗り込んで1人で去って行った。なぜ救急車だったのか、それはいったん出した辞表が楊尚昆などの説得で取り下げられたため、趙紫陽が戒厳令の布告を前に、自分は関わりたくないと「病気になったので休暇をとる」として病院に入院することになったからだったことは後になってわかった。

中国メディアの報道では、この時、趙紫陽と共に李鵬も天安門広場の学生たちを見舞ったと報道している。だが、現場に居合わせた筆者は一度も

李鵬を見かけなかった。一体なぜなのか、趙紫陽の『回想録』がその答えを教えてくれた。

「5月19日の早朝に私が天安門広場の学生をたずねた時にも、李鵬は私が広場に行くことに反対し、中央弁公庁に私を止めるよう迫った。非常にたくさんの学生が7日間もハンストを続けているのに、党中央の幹部が誰一人訪れていないというのは、どう考えても弁解のしようがなかった。私は、絶対に行く、他にだれも行かないなら私一人で行くと言い張った。私の意思が固く、思いとどまらせることができないとわかると、李鵬は気が変わった。だが、彼はたいそう恐れていて、広場に着いたと思ったらすぐに逃げて行った。」

つまりわれわれが趙紫陽に気づいて取材を始めた時には、李鵬は既に現場から立ち去っていたのだ。

それは、趙紫陽は広場の学生たちにとって「味方」であるから身の安全は心配ないが、李鵬は打倒すべき「敵」であるから、趙紫陽と同じような顔をして学生に会うことに、李鵬は身の危険を感じ取っていたことを意味する。

当時、趙紫陽が学生と直接会った現場に立ち会うことができた筆者は、もうひとつ不思議なことに気づいていた。広場の多くの学生たちは趙紫陽が話しかけている間、素直にこれに聞き入り、ほとんど質問らしき質問をしなかったということだ。もちろんハンストの学生を見舞うという形であったから、趙紫陽が直接話しかけた学生には、質問する気力は残っていなかったのかもしれない。だが、それは学生たちにとって前日の李鵬との会見で自分たちが要求した、待ちに待った最高指導者との対面だった。それなら李鵬との会見の時と同様、様々な質問や要求が、バスを取り巻く元気な大勢の学生から投げかけられても不思議ではなかった。だが、彼らの態度はまるで異なり終始従順だった。それはあたかもまさに落城しようとする天守閣の中で涙ながらに語る殿様の話を、家来が肩をおとして聞いているような光景でもあった。趙紫陽と広場の学生たちが、物理的につな

がっていたかどうかは断言できないが、少なくとも精神的に相通じるものがあったことだけは間違いない。この時、学生の中には趙紫陽にサインを求めたものまでいた。

その日の夜、19日午後10時国務院が、北京市西部にある人民解放軍の後勤部（兵站を担当）の講堂で、北京の党、政府、軍隊の主要幹部を集めた「幹部大会」を開き、緊急の呼びかけを行った。この中で李鵬は、断固として動乱を制止し、いち早く秩序を回復するため、天安門広場でハンストをしている学生は速やかに広場を離れるよう求めた。また多くの学生市民に対してハンストをしている学生を支援しないよう呼びかけた。さらにわれわれは断固として果断な措置をとり、速やかに動乱を収束させると強調した。

この模様は、20日の午前0時半から、中国中央テレビによって全国に放送され、黒縁の眼鏡をかけ黒い人民服姿で演説する李鵬の物々しい姿が、その後の大弾圧を予感させた。壇上には、楊尚昆や喬石など主だった最高指導部の面々がずらりと顔をそろえたが、趙紫陽だけその姿がなかった。それは、趙紫陽が病気を理由に休んだからだと言われているが、実質的にはすでにその権力を失い、緊急事態への対処は、李鵬が代わりに陣頭指揮をとることを中国全土に知らしめることにもなった。

20日午前9時半、李鵬は北京の主要地域に対する戒厳令に署名し、同時に中国のテレビやラジオは一斉に午前10時からの戒厳令の布告を放送した。いよいよ人民解放軍による学生運動制圧の実力行使が動き出した瞬間である。

9. 結び

その後の軍の動向や、学生側の対応、さらには軍の民衆弾圧の過程も、詳細に調べてゆくうちに多くの真相が判明してきた。だが、本論文は、中国共産党の最高指導部が学生運動に対してどのように対処するかをめぐっ

て繰り広げた政治闘争を、特に学生運動に理解を示した総書記の趙紫陽と、これに危機感を抱いた国务院総理の李鵬が残した記録から浮き彫りにしようという趣旨であることから、その後の詳細、つまり戒厳軍の具体的な動きや天安門広場の制圧の内情については、このあと執筆を予定している新著『目撃 天安門事件 歴史的民主化運動の真相』の中で記すことにする。

今回研究の対象とした趙紫陽の『回想録』及び『談話』と李鵬の『日記』は、いずれも当時、極めて重要なポストに就いていた指導者が自ら残したものであり、信ぴょう性が高く、それぞれの主張が明確にあらわれる貴重な記録であった。

これら別々の記録を、それぞれの事象ごとにつき合わせることで、当時、対立する双方の指導者がどのような思惑で発言し、どのような葛藤を繰り広げたかがあぶりだされた形といえる。

また先行研究として多大な成果を残された横浜市立大学名誉教授 矢吹晋氏らの『天安門事件の真相(上・下)』(蒼蒼社)や、『チャイナ・クライシス 重要文献 第1巻～第3巻』(同)に記された多くの事象の正確さが改めて実感された。今回の研究では、各指導者の内心の動きを踏まえて、それらが有機的につながりを持つことが示されたのではないかと考える。

またこれらの記録は、これまでに海外に持ち出されて公開された中国共産党の「秘密文献」や亡命者などによる「調査報告」などの正否を確かめる上でも大切な証拠材料になった。総じていえば、「秘密文献」を元にまとめられた『中国「六四」真相』(明鏡出版社 邦訳『天安門文書』文藝春秋社)で示された数々の証言や記録が大筋で正確であったことが裏付けられたと言える。

なお、天安門事件に関しては、中国政府が完全な報道管制を敷いているため、判明しない事実や当時の記録もお多く残っていると考えられる。少なからず疑問も残されている。真相究明はまだ道半ばといえるであろう。本論文がその中で、少しでも役割をはたせれば幸甚である。

注

- (1) 香港の雑誌『争鳴』1996年6月号 6～7頁
- (2) 『悲壯の民運』第四版 明報出版社 11頁 及び筆者取材メモ(当時)
- (3) 『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』北京日報出版社 23頁
- (4) 中国共産党機関紙「人民日報」1989年4月26日 第1面
- (5) 『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』北京日報出版社 23頁 及び筆者取材メモ(当時)
- (6) 中国共産党機関紙「人民日報」1989年5月5日 第1面
- (7) 『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』北京日報出版社 73頁 及び筆者取材メモ(当時)
- (8) 当時の新華社はじめ中国メディアの報道。及び
『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』北京日報出版社 82頁
- (9) 『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』北京日報出版社 83頁 及び筆者取材メモ(当時)
- (10) 香港「東方日報」1989年7月16日
邦訳『チャイナ・クライシス重要文献 第3巻』蒼蒼社 228頁

主な参考文献

- 『改革歷程』香港新世紀出版 (邦訳は『趙紫陽極秘回想録』光文社)
『趙紫陽 軟禁中談話』香港開放出版社 (邦訳は『趙紫陽 中国共産党への遺言
と「軟禁」15年余』ビジネス社)
『李鵬六四日記真相 付録原文』澳亜出版有限公司版
『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』中共北京市委弁公庁編 北京日報出版社
『北京 風波真相和実質』中央党校党的基本路線課題研究組編 大地出版社
『歴史的創傷 上・下冊』寒山碧 編 東西文化事業公司出版
『北京学生運動50日』中国時報記者グループ編 時報文化出版
『悲壯の民運 第4版』香港 明報取材班編 明報出版社
『中国「六四」真相 上・下冊』張良編 明鏡出版社
(邦訳は『天安門文書』文藝春秋社)
『八九中国民運資料冊』香港中文大學編 中文大學学生会出版
『天安門事件の真相 上・下巻』矢吹晋編著 蒼蒼社
『チャイナ・クライシス「動乱」日誌』村田忠禧編 蒼蒼社

天安門事件

『チャイナ・クライシス重要文献 第1巻～第3巻』 矢吹晋編訳 蒼蒼社

『鄧小平 最期の闘争』 江之楓著 戸張東夫訳 徳間書店

(順不同)